

「運動」概念に関する史的考察
～雑誌『運動界』記事にみる「運動」の概念～

A Historical Study on the concept of Undo
～ Concept of Undo by the article in the sports magazine
“ The Athletic World ” ～

野口 邦子

Kuniko NOGUCHI

1. はじめに

体育（科）学とか、スポーツ科学とか、呼ばれる分野はまだ「若い」学問の分野である。その理由の一つにはスポーツや遊びを学問の対象にすることそのものが、長い間、タブー視されてきたことや、スポーツや遊びの用語が学問のための用語には必ずしも適合しやすいとはいえないという側面があったことなどがあげられる。そのためこの学問領域に固有の専門用語の概念規定は困難となり、いまにいたっても不十分なままにされている。その好例が「運動」という用語であり、その概念である。運動会の種目を一瞥するだけでも、そこでいう「運動」とは遊びなのか、運動競技（競技スポーツ）なのか、身体の訓練としての体操なのかが不明であることがわかる。

しかし、1960年代の後半に入って、我国では「運動」の概念を明確にする必要性が説かれるようになった。それは「運動学」という学問の成立をめぐって展開されている。東独から発信された「運動学」(Bewegungslehre)の研究対象たる「運動」(Bewegung)の概念規定が必要になってきたためであった。しかし、この運動概念の規定はドイツ語や英語の表記に立ち返って、Bewegung (movement)なのか、Uebungen (exercise)なのかについての検討を加えたものであり、「運動」に関する基本的諸概念について取り上げたものであって¹⁾、漢字の表記としての「運動」それ自体を検討するものではなかった。これに対して、大学教育にみる正課の「学問」に対して課外の活動が「運動」として展開した歴史的事情について明らかにした研究があることを指摘しなければならない²⁾。これは本研究が試みようとする問題を取り上げている研究であるが、以下において検討しようとする雑誌『運動界』を史料として取り上げていない点が指摘されるところである。雑誌の持つメディア性に着目したとき、運動の概念が広く普及しかつ定着するのに『運動界』

こそが大きな役割をになったとみることができるためである。本研究において日本で最初のスポーツ雑誌³⁾といわれている『運動界』を運動という概念の成立事情を探るための史料として取り上げた理由の一つはここにあるわけである。いっぽう、この『運動界』は明治30年7月に創刊され、33年4月の通巻33号をもって終巻となっているが、この時期に本誌が刊行されたことは「運動」という言葉を通して日本にスポーツが普及していたという事実を示すものと受け止めることができる。このスポーツの普及・進展にあわせて「運動」という言葉が一般に『運動界』という雑誌を介して浸透していったのだとすれば、「運動」概念が規定される契機を『運動界』が与えたと考えることができる。ここにも、運動概念を解明するための基礎的手がかりを『運動界』が提供しているとの側面を垣間見ることができよう。本研究において本誌を取り上げ、「運動」概念を解明しようとした第二の理由をここに求めるものである。

2. 明治期のスポーツジャーナリズムにみる『運動界』の地位

1) 雑誌『運動界』の概要

(1)『運動界』発行の趣旨

この趣旨に関しては『運動界』第1巻第1号の巻頭に「『運動界』発行の趣意」として掲げられた。その冒頭に「知徳体の三育は個人の教育欠くべからざる三要素にして、其中の一の者怠るときは、其他の二得る能はざるは、何人もよく認むる所にして、今更新しくここに贅説するの要なかるべし」との立場から、現今、知育・徳育の偏重の教育がなされていることを指摘してこれを是正すべく体育を奨励することの必要性が訴えられているのである。多少長くなるが、次にその主張を引いて置くことにしたい⁴⁾。

然るに熟ら我国当時の教育界を観察するに、知徳の二育のみは充分に施されて、青年子弟は事物の道理を解し、人道の何者なるかを知るに於いては、実に刮目して見るべきものありと雖も、翻て体育は如何にと見るに、悲しい哉、これのみ共に平行して進むべき知徳の二育に遙か後れて、只に進まぬのみか、時として退かんとするの狀態を示すことあり。故に今の青年子弟は知に富み徳に明らかなるも、身体は薄弱にして、較もすれば病に罹り、学業まだ成らず、君に報ひ国に尽くすに至らずして、空しく夭死する者甚だ多し。(中略)されば今の時に於て、何よりも先づ注意すべき急務は、盛に体育を奨励し、これを知徳の二育と共に平行せしめて、今の青年子弟をして、知徳に豊富ならしむると共に、身体を健全にし筋骨を強壮ならしめ、頭のみ止まらず兼ねて身体をも亦大ならしめんことを図るにあり。古の格言「健康の精神は健康の身体に宿る」といふは、実に千古不拔の真理を道へるものなり。將

来の我国は常識に富みて能く業を勉め法を守る国民を以て組織せざれば不可、斯の如き良国民を得んと欲せば、先づ盛んに我青年子弟に運動体育の事を奨励し、以て健康なる精神の宿る健康なる身体を得しむること最も大切なりといふべし。

このように体育の奨励・促進を必要としているにもかかわらず、この方面の情報を提供するための手段を欠いているのが実情であった。そこで、次に掲げるように本誌の刊行をもって「運動体育」の情報を提供するメディアとしての役割を担おうとしたという⁵⁾。

当今雑誌の数は汗牛棟も只ならざれども、殆ど皆知徳を増進するの料を供する者にして、殊に青年子弟の為に発行さるる所謂少年雑誌なる者は、悉く文学芸術の事項を記載し、知徳の二育に偏して、運動体育の事に意を用ゆる者は絶えて無しといふも不可なし。これ実に当今の教育界に於ける一大件点にして、一日も速に補足すべき所ならずや。吾等不敏敢て己の力を慮らず、ここに『運動界』ある一雑誌を発行して弘く天下に見ゆるは、一にここに感ずる所あるを以てなり。我『運動界』は決して知徳の二育を軽ずる者に非ざれども、最も重きを体育の事に置き、力の及ぶ限りこれを奨励して、勇壮活発ある運動遊戯を青年子弟の間に流行せしめ、以て常今の患ある優柔懦弱の風を移つし、かくて我国将来の継承者をして、剛健なる国民たらしめんことを期する者なり。

(2) 雑誌の陣容

『運動界』雑誌は本誌を権威づけるのに充分な人物の賛同を得てスタートした。名誉会員の20名の中で当時の体育・スポーツ界で著名な人物であった嘉納治五郎（高等師範学校校長）・日高藤吉郎（日本体育会創始者）・坪井玄道（高等師範学校教授）等がその名を連ねている。編集の主任は『万朝報』紙の英文担当記者として活躍していた山県五十雄が担当し、主事は今日の大手広告代理業の博報堂を築いた瀬木博尚があたっている。しかし、「有力なる社友の後援が有り又適当なる編集の主任を得たり」⁶⁾とはいえ、すべての雑誌記事の執筆を編集主任に委ねることは事実上困難であった。そのため、執筆のための協力を運動のできる者（＝運動家）から得なければならなかった。本誌の刊行の時期は明治期の後半に入っていたが、しかしスポーツは多くの国民の知ることとはなっておらず、僅かに中等・高等教育期間の学生たちによってスポーツが楽しまれていたに過ぎないからである。書き手も少なく、読み手も少ない時代であった。そのため、次の引用にみられるように、本誌刊行の計画の段階から帝国大学及び第一高等学校の学生たる運動家諸氏に記事の執筆を確約しておかねばならなかった⁷⁾。

幸に帝国大学及び第一高等学校の運動家諸氏吾等が計画を聞かれ、大に其趣意を賛し、一臂の力を吾等に与へんことを約されたり。即ち諸氏は、各々其所長の運動遊戯に関する文を稿し、今後これを我『運動界』に寄せらるるべし。此等の諸氏は皆今日の運動界に於て優に牛耳を執るの人、其筆に成る者の大に見るべきは疑いを容れざるなり。且つ雑誌全体の編集

整理に関しては、これを多年雑誌操觚の業に経験ある人に依託したり。

このようにして確保した執筆陣は次に掲げる面々であった⁸⁾。

井原外助・板坂智吉・伴 宜・中馬 庚・加藤主計・栗原巳己蔵・五来欣造・朝倉伝二郎・
篠田治策・守随啓四郎・鈴木信太郎・山県五十雄(編集主任)

上記の編集委員は実際に筆をとって雑誌記事を認めたことはもちろんであるが、これだけではなかった。「『運動界』は少年青年が馳駆奔走するべき唯一の機関なり其中堅は帝国大学出身の学生諸彦及び同校在学の学生諸氏、第一高等学校其他官立私立高等専門の学生諸氏にして、先鋒となり左右翼となるものは、全国各府県の勇士猛将なり、明治の新青年たる諸君希くば奮ってこの大軍隊に集まり来たれ」⁹⁾と示されていることに注目されたい。この引用は懸賞論文募集のための一文でしかないが、本誌の全体を眺め返してみると、中央にある官立の学校関係者だけでなく、早稲田大、慶応大、および日本体育会体操学校などの私学の関係者や、地方の尋常師範学校の学生までもが執筆の陣容に組み入れられていたことがわかるためである¹⁰⁾。

(3) 内容的特徴

「『運動界』は如何なる雑誌なりや」との見出しのもとで、冒頭の趣意をさらに詳細に述べる目的で、次のように記している。これによって雑誌『運動界』がどのような内容の記事を掲載しようとしたのかを窺い知ることができよう¹¹⁾。

『運動界』の紙面はキク版二倍大、紙数は廿頁にして、毎月一回五日を以て発行する運動遊戯専門の雑誌にして、読者を学校生徒学生青年少年の間に求め、専ら戸外運動、兵式及室内体操に関する記事論説等を掲載す。これを詳言すれば、本誌に収むべき項目は、野球、漕艇、競走、フットボール、テニス、クリケット、柔軟体操、器械体操、水泳、狩猟、漁魚、行軍、柔道、撃剣、馬術、弓術、自転車術、旅行、探検、其他總て 戸外の運動遊戯にして、此等の事項を平易に又面白く、且つ多数の画図を挿入して記述説明すべく、又毎号遊戯運動に関する画図一葉を写真銅板に製して付録とすべし。『運動界』は總ての戸外運動遊戯に関する規則心得等につきて、専門家の筆に成る説明講述等を掲載し、又運動社会の出来事を詳細に報道すべし。且つ吾人は全国の高等学校、中学校、師範学校其他大小の諸学校に於ける運動家諸氏と連絡を通じ、相扶け相輔ひて、其道の普及進歩を図らんと欲し、切に諸氏が其地方に於ける運動社会の出来事に就きて、通信を寄せられんことを希望する。又『運動界』は『交詢』の一欄を設けて、凡そ運動遊戯に関する質疑質問を受け、専門家の手に成る詳細なる説明応答を掲ぐべし。読者諸君もし運動遊戯上疑を挟む点あらば、之を吾人に質問するに躊躇すること勿れ。

2)『運動界』とスポーツジャーナリズム

体育やスポーツに関する記事を掲載している雑誌にはどのようなものがあるのかという観点から種別に分類してみると、・スポーツの記事を一部掲載した一般誌、・体育雑誌との接点をもつ教育雑誌、・体育雑誌、・スポーツ雑誌に大別され、スポーツの雑誌は（ア）総合スポーツ雑誌と、（イ）個別スポーツ雑誌に分けられることがわかる。そこでここで明治期に刊行されたスポーツ関連の雑誌を総合誌と個別誌に分けて、これを一覧表にして示しておきたい。（表1参照）この表は本研究で取り上げる『運動界』誌が刊行されてからこの種の雑誌が発行をみていることを示しており、したがって本誌がスポーツ雑誌刊行の先鞭をつけたものと推すことができよう。

表1 明治期に刊行のスポーツ雑誌一覧

	雑誌名	刊行の期間
総合誌	『運動界』	明治30年7月～明治33年4月（通巻33号）
	『武徳誌』	明治39年6月～昭和20年7月（終巻未詳）
	『運動の友』	明治39年11月～41年4月（通巻18号）
	『遊楽雑誌』	明治40年3月～5月（通巻3号）
	『運動』	明治40年4月、（創刊号のみ）
	『運動世界』	明治41年4月～大正3年5月、通巻56号
個別誌	『獺友誌』	明治30年10月～32年12月、通巻27号
	『獺輪雑誌』	明治35年8月～（終巻未詳）
	『山岳』	明治39年4月～現在
	『月刊ベースボール』	明治41年11月～44年8月（通巻34号）

ところで、表1に掲げたスポーツ雑誌をみると、短命に終わっているものが多いことがわかる。これはこの時期の日本のスポーツを全体として眺めたときには未成熟であり、広く国民の知るところとなっていなかったといわねばならない。長命であった『山岳』や『武徳誌』はそれぞれ日本山岳会や大日本武徳会という全国的な規模を有する統括団体の機関誌であったのだが、これを除けば当時のスポーツをめぐる状況はスポーツ雑誌が生き長らえるためのすべを欠いていたといわねばならないのである。

しかし、明治30年7月5日に『運動界』誌が創刊されると、各紙がこぞってこの刊行を取り上げ、歓迎している。東京日々、時事新報、都新聞、万朝報などがそれである。とりわけ、万朝報は本誌『運動界』の編集主任の山形五十雄が現役の万朝報の英文担当記者であったためであろうか、本誌の賛辞に止まらず「其価は五銭、極めて至廉となす」と報ずるに及んでいる¹²⁾。このように本誌に対する賛辞は額面どおり受け止めることができないとしても、「我邦運動界専門の雑誌の嚆矢」として位置づけている点は注目してよいと思う。既述のように、「運動」に関する雑誌がその後刊

行されるようになり、「運動」という言葉が広く世間に知れ渡る契機を与えたからである。そこで、その起点となった『運動界』では「運動」という用語がどのような意味で使用されてきたのか、ひいてはその概念をどのように規定していたのかについて検討していくことにしたい。

なお、ここでとりあげようとする『運動界』誌は通巻33号しか世に送り出すことができなかった点について触れておきたい。それはスポーツの愛好者が少なく、従って雑誌刊行を継続するだけの資金が不足したことを物語る。したがって経営のための努力がなされ続けねばならなかったといわねばならない。それは三度にわたってなされている。第一の経営努力は講読単位として支部制をしいたところにみられる。支部規則によれば、「支部は『運動界』購読者二五名以上を有する地に設く」と定め、支部に幹事を置き、その幹事に「購読者を募集する義務」を課すとともに、その代償として幹事による投書の「掲載」、広告の「特別割引」、当社出版物の「実費」購入の権利などの特典を与えるものであった¹³⁾。第二の経営努力は投稿規程の明示と懸賞論文の募集にみられる。投稿の権利が各支部の幹事にのみ与えられていたものが、講読者なら誰でも投稿できるようにしかけている。それは第2巻第4号の見返しの頁に「運動界懸賞投稿募集」の見出しのもとで、「誰題は別に制限せず、ただ旅行、遠足、登山、乗船、漁獵。等其他凡ての運等遊戲中にて、諸君がこれまで経験せし中にて、最も勇ましく尤も壮快に感ぜしものを選んで寄稿せらるべし」¹⁴⁾として原稿寄草を募るものであった。この投稿募集は懸賞つきのものであり、賞品は次のように示されている¹⁵⁾。

賞 品

- 第一等賞 …… 金杯(裏面に当選者の名を刻す)及び球(野球用)一個
- 第二等賞 …… 銀牌(同)及び同前
- 第三等賞 …… 銅牌(同)
- 第四等賞 …… (本誌三カ月分)
- 第五等賞 …… (同 二カ月分)

第2巻第7号になると、投稿規則の変更が提示された。それまでは「運動遊戲」に関するものならどのような内容のものでもよいとしていたが、これをさらに広げて「投稿は必ずしも運動の事に限らず、詩文伝記論説等何れにても、士気を鼓舞するに足り、又は世に益ありと認むるものは喜んで掲載す」¹⁶⁾に改められたのである。

第3の経営努力は広告収入を得ようとしたところにみられる。広告収入によって編集・印刷・製本料の一部をまかなうことが試みられている。発刊当初の広告料が1頁につき7円であったのが¹⁷⁾、第2巻第10号からは12円に跳ね上がっている¹⁸⁾。これは広告収入の増収によって経営の安定化を図ろうとした経営努力の一端であったといえよう。

3. 雑誌『運動界』記事にみる「運動」の概念

1) 明治期における「運動」表記の登場と「運動」の多義性

一般に「運動」とは「養生のため身体を動かす、体操散歩の類」及び「或る事に奔走尽力する」、あるいは「物体が動力によって動く状態」をさす¹⁹⁾。したがって、この定義による運動とは“身体を運動させ、以て健康な身体をつくる”という観点からみた「運動」の概念であるといえる。このような考えは、近世の日本における東洋的養生論に垣間見ることができる。すなわち、貝原益軒はその著『養生訓』のなかで、「わかき人は食後に弓を射、鎗太刀を習い、身を動かし、歩行すべし。(飲食上)」²⁰⁾として認めているからである。

いっぽう、西洋的養生論の立場からは運動の必要性が説かれるようになるが、すでに幕末には西洋事情に詳しい福沢諭吉が西洋的養生論(=衛生論)の立場から「運動」を奨励している。福沢が設置した学校では慶応4年(1868年)に「食堂規則」を定め、その中に「午後晩食後は、木のぼり、玉遊等、『ヂムナスチック』の法に従ひ、種々の戯いたし、勉て身体を運動すべし」として運動を奨励し、それを実施するための施設として「中庭を以て運動場」に当て、「『ブランコ』を造りて盛んに運動」させたという²¹⁾。この私塾に対して、国が設置する学校でも運動の必要性を西洋医学の立場から説き、これを制度の上で実施するようになった。明治5年4月、南校は学則を改正して、毎日9時から30分間にわたり「体操」の時間を時間割に組み込みことや、正課後2時間の「体操及び外出散歩の時間」を設けることを掲げ、さらに体操を実施するための場として「運動所」を用意するに及んでいる²²⁾。さらに、明治9年に、開成学校は「生徒心得」を定め、その第1条に「生徒たる者必ず散歩、戯芸、体操等を為し以て身体の運動を為すべし体操を教員を付しその術を演習せしむ」と示して、運動をすることを生徒に保障するに至っている²³⁾。

このような西洋医学に立脚した「運動」観は初期の国よる近代的教育行政全般の中でも確かめることができる。文部省学監として明治初年代の学校教育に貢献したマレー(D.Murray)は、明治6年に文部大臣田中不二麿に申報を提出する。それが文部省第一年報のなかで「学監米人博士グウィッド・モレー申報」として掲載されているので、氏の「運動」観は次の引用によって確かめることができる。このモレー申報を文部省がその年次報告書(=年報)を通して周知方を図ったことは、その内容について国が選択すべきことがらであったことをしめすものである²⁴⁾。

蓋国家平安の極度に至るは人民の教育に在り故に教育は政府至大の職業と言べし元来人民身体の康寧は知識の敏捷終身の完全等は皆教育に因て成るものなり今其理を説かんに教育は人材を陶冶する基本にして勉て人をして其身体を運動して健全を得せしめ且能く之を施行す故に此三者完全なれば即ち是教育を受けた人と云ふべし。

このように「運動」という表記は明治以前から使用され、養生や衛生の手段であるとみなされてきたことがわかる。これは「運動」という表記が直接に「運動種目」をさしていなかったことを物語

っていよう。それでは、「運動」という表記が「運動種目」をさすようになったのはいつごろからであろうか。

「運動」が「運動競技種目」を表すようになるのは、坪井等の『戸外遊戯法 - 一名戸外運動法』(明治18年、坪井玄道・田中盛業編)²⁵⁾やストレンジの『Out Door Games』²⁶⁾や下村泰大の『西洋戸外遊戯法』(明治18年)²⁷⁾が刊行され、広く運動競技種目が普及してからであるといえる。しかし、実際にはストレンジが中心になって明治19年に組織した校友会「運動会」(Universty Athletic and Rowing Club)であった。この「大学における恒久的な運動奨励機構の組織化」の目的は「学生に対する日常的な運動用具施設の維持供与と、平素の運動の成果を発表する場としての水陸両運動会の開催をとおして、学生の“recreation”としての運動の効果を発揮するにあった」²⁸⁾という。かくして大学に「運動競技部」が結成さ、これが活発な活動をするようになると、上級学校における競技運動が下級の学校に伝えられることになり、下級学校では運動競技部を結んで活動を開始することになった。例えば、明治23年に第一高等中学校は寄宿寮で「文武の諸技芸を奨励する」目的で「校友会」を9部を以て組織している。この9部のうち「文芸部」を除く8部が運動部(ボート、撃剣、柔道、弓術、ベースボール、ロンテニス、陸上運動、遠足)であった²⁹⁾。また、明治19年に軍隊式的全寮制を発足させた高等師範学校の場合も、明治28年には、これを学生寮に改組し、明治29年には「運動会」を組織して課外運動の奨励をはかったといわれている³⁰⁾。

さらにまたこの大学において定着した「運動競技」を意味する「運動」の概念は中等教育機関にも波及している。これは東京府尋常中学校(現、日比谷高校)が明治23年に設立した学友会が「文芸部」とともに、「武術、運動、遠足、遊泳、漕艇」の各部を以て組織された、ということからも知ることができよう³¹⁾。

このように「運動」という表記は諸学校の校友会「運動競技」部の設立にともなって、新たな意味が付与された概念になっていったといえることができるのである。

2) 雑誌『運動界』記事にみる「運動」の概念

(1) 『「運動」界』誌が取り上げた運動種目にみる「運動」の概念

「運動」の表記がこの『運動界』の中でどのような意味を付与されていたのかについてみてみると、まず第一に掲げねばならないのはこの雑誌の誌名が「運動界」であり、これが“The Athletic World”の英語表記が使用されていることである。このことから、本誌では「運動」とは“Athletic”すなわち「競技」であることを表明しているのである。いっぽう、本誌の創刊号の中で『「運動界」は如何なる雑誌なりや』の論説を掲げ、次のように認められている点が注目されねばならない。すなわち、『「運動界」は(中略)運動遊戯の雑誌にして、読者を学校生徒青少年の間に求め、専ら戸外運動、兵式及び室内体操に関する記事論説等を掲載す』と示し、「本

誌に収むべき項目」として「野球、漕艇、競走、フットボール、テニス、クリケット、柔軟体操、器械体操、水泳、狩猟、漁魚、行軍、柔道、撃剣、馬術、弓術、自転車術、旅行、探検、其他総て戸外の運動遊戯」を取り上げているためである³²⁾。このように、『運動界』誌では「運動」とは「運動遊戯」のことを指し、したがって広義のスポーツの概念を指していることがわかる。しかし、誌名が「運動界」であるのだから、「運動」という表記をもって「運動競技」と「遊戯」の双方をくくっていると受け止めることもできる。そこで、この問題が実際の記事の中でどのように区別して使用されているのかについてみていくことにしたい。本誌が掲載している記事の内容は大きく「体育・スポーツ一般」、「各種スポーツ」、「体操」、「教練（兵式体操）」、「遊戯」、「運動会」、「旅行および遠足」、「地方のスポーツ活動」、「スポーツ茶話」に分けられる。この中でも、一つひとつの種目の傾向をみると、概ね表2のようであった。

表2 『運動界』誌に掲載の各種スポーツ種目に関する記事の頻度

種 目		頻 度	
漕艇（ボート）	84	テニス	11
野球	62	和船	11
柔道（術）	20	銃猟	10
剣道（術、撃剣）	18	陸上運動	2
水泳	18	フットボール（蹴球）	1
自転車	17		

表2はまた、当時の人気スポーツがなんであったかを知らしめてくれる。漕艇と野球の記事が圧倒的に多いことから、学生スポーツ界における人気を二分していたといえそうである。この時期にそれでは陸上競技が人気スポーツではなかったのであろうか。これについては、陸上競技とか陸上運動とかの表記での記事が2編しか掲載されていなかったために、そのような誤解を招くことになったといえる。しかしこの種目は「運動会」に関わる記事の中で掲載されており、人気スポーツであったといわねばならない。その他に、遊戯、旅行、遠足、修学旅行、遠足、紀行、スポーツにまつわる話題、野次なども掲載された。スポーツに関するとらえ方の広さをここに伺うことができよう。なお、スポーツ誌たる本誌に「体操」や「教練」（兵式体操）が取り上げられているが、これは戦争を不可避と考えていた時代思潮の反映であるともみることができる。このようにみると、「運動界」誌が包含した「運動」の概念は広義のスポーツと同義であったといえよう。

（2）「運動」の表記を用いた見出し記事にみる「運動」の概念

「運動」という表記をもちいて論じられた記事からも、本誌がとっていた「運動」の概念をし

ることができる。この種の記事は少なくないので、まずは巻号の単位でこれを一覧にまとめ、概観できるようにして置く必要がある。表3はそのような目的でまとめられている。

表3 「運動」の表記を用いた見出し記事

巻 号	記 事
1・1	運動界発行の趣意
1・3	『運動界』は如何なる雑誌なりや 運動場裏の行状
1・4	運動茶話 運動我観断片 運動我観断片 運動彙報
2・1	運動つれづれ草 運動佳話 運動茶話 運動彙報
2・1 (臨時大付録)	運動家の猛省を促す
2・2	運動
2・3	運動界懸賞投稿募集 運動界片々
2・4	運動界の機運 運動会につき当局者を戒む
2・5	各地運動界景況
2・6	運動の呼声 運動彙報
2・7	運動の奨励は富国の要訣なり
2・8	五城尚武会の夏期運動会 商船学校学生海上運動会
2・10	運動消息 運動界報
2・11	運動と風紀 帝国大学『運動会』を論ず 奈良県尋常中学校第五週年紀年大運動会
2・12	運動彙報 運動と風紀（承前） 運動彙報

巻 号	記 事
3・1	農科大学運動会 運動家の弊風を論ず
3・2	運動の精神 元日の運動会 青年運動会 東京大学運動会 農科大学運動会 東京市の運動場
3・3	今春第一高等学校運動場裏
3・4	京都大学運動界
3・5	木下京都大学総長の運動意見（演説） 東京帝国大学運動会選手競漕記事 日本中学校春期陸上大運動会 工業学校の運動会
3・6	運動の目的 運動界雑誌を読み白於兎生答ふ
3・7	運動会
3・8	運動会 運動会 農学校の運動会
3・11	運動の弊風 運動法に就て 栃木農学校の運動会 各学校連合大運動会 山梨県尋常中学校運動会 新潟県師範学校校友会秋期運動会 仙台の運動会
3・12	運動法に就て（承前） 駒場秋季運動会 徳島中学校秋季運動会 金沢農学校運動会
4・1	運動我観 運動家逸事
4・2	運動私見
4・3	西洋伝来の運動を可とする論者 京都大学運動会

表3の中から若干の見出しの内容について検討してみると、「運動」とは「運動競技」をさしていることがわかる。すなわち、第1巻1号に「運動場裏の行状」という記事がみえる。この記事の内容は第一高等学校と横浜在留の外人との間の野球の試合において数千人の見物人のうち甚だ行状の正しからぬ者がいたが、馬鹿野郎とか赤髭奴とかいう聞き苦しい悪口雑言をはいていたことに対する戒めの記事であった。この中で、「今後運動競技は漸く盛んとならんとす、これより学校と学校、若しくは団体と団体との間に競技常に催されん。」³³⁾との記述がみられるが、このことから“野球は運動競技である”とみなしていることを知ることができよう。また、本誌ではいわゆるスポーツマンとその精神が取り上げられ、そのスポーツマンを「運動家」という表記で語っている。その一部を次に引いておこう³⁴⁾。

運動家の期する所は実に力は山を抜かんと欲し、気は世を蓋はんと欲するを要す。

運動を以て社会学上必要元素となすは、実にその社交要素に因す。運動家たる者は須らくこの要求を利用して、社会を淫靡柔弱の淵より救済すべし。彼の社会に同じ、世の弊風とともにそのりをすすする如きは決して運動家に非ず。

運動家の度量は天空海闊の如くなるべく、その情趣また光風せい月の如きを要す。

運動家といふもとより美術家哲學家宗教家といふ如く画然その一専門に従て、一職業と取る者を指すに非ず。体育運動の要を知りて事に運動に従ふものみな称して運動家と云ふを得べし。その職業學問に至りては吾人みな分業の法に従てその一を選はざるべからざるも、運動に至りては何人も之を勉めざるべからざるもの。運動家との特称を称し得る社会は甚だ憐れむべきの社会なり、国民悉く運動家となるの暁は即ち富強無比の国家を得るの時なり。

学校に運動家あるは、なほ国に軍人あるが如し。敢て運動家は武力を以てその校を守るといふに非るも、多くはその校の気風特質は運動家によりて発揚され、運動家によりて保護さる。殊にその體質に於て、その傾向に於て、その性情に於て、両者の相にたる所頗る多し。運動家たるものの期する所亦常にこの心を以てせざるべからず。

上記の内容から推すと、「運動家」とはアマチュアの“スポーツマン”をさし、したがって「運動」とは「スポーツ」を指しているといえよう。ともあれ、雑誌記事からみても、本誌が示す「運動」という表記は「運動遊戲」「運動競技」を指し、各種の運動種目の総称をも指しているといえよう。

4. 雑誌『運動界』が新たな「運動」の概念形成に果たした役割 ～結びにかえて～

『運動界』誌は本邦のスポーツ雑誌の嚆矢であり、この雑誌がその後のスポーツ雑誌の刊行の先鞭をつけた意義は大きいものがあつた。雑誌というメディアを通して、スポーツを青少年に伝えることを可能にする契機を与えたからである。また、本誌の雑誌名に「運動」を用いたことによって、

この表記が新しい意味を付与するようになった。すなわち、身体を運動させることによって健康な身体の育成をはかる、という意味でもちいる身体運動 (Physical Exercise) の意味から、「運動遊戯」や「運動競技」の意味をも有するようになったのである。陸上競技もサッカーもテニスもいずれも運動種目であるが、これらの運動競技の総称概念として「運動」が用いられるようになった。「運動部」がまさに「運動競技部」を意味するようになったのは、本誌が刊行されるようになった時期までさかのぼることができるのである。ともあれ、本誌の執筆陣がその当時の東大の「運動会」の会員であったし、本誌が下級の学校の生徒に講読されるようになって、本誌のいう「運動」の概念は彼らにも把握されるようになっていったといえる。ここに校友会運動部の下級学校への波及と共に、本誌が「運動」という表記に「運動遊戯」の意味だけでなく、「(競技)スポーツ」及び「運動競技」の意味を載せたのに少なからぬ役割を果たした点を見出すものである。

【注記及び引用・参考文献】

- (1) 岸野雄三: 運動学の対象と研究領域、『序説運動学』所収、大修館書店、1968、pp.11-15)
- (2) 木下秀明、『日本体育史研究序説』不昧堂、1971、pp.190-200)
- (3) 日本体育大学体育史研究室: 『運動界 解説』大空社、1986、p.3
- (4) 「運動会発行の趣意」、『運動界』第1巻第1号、明治37年7月、p.1
- (5) 「運動会発行の趣意」、『運動界』第1巻第1号、明治37年7月、p.1
- (6) 「運動会発行の趣意」、『運動界』第1巻第1号、明治37年7月、p.1
- (7) 「運動会発行の趣意」、『運動界』第1巻第1号、明治37年7月、p.1
- (8) 「『運動界』は如何なる雑誌なりや」、『運動界』第1巻第1号、明治37年7月、p.2
- (9) 「本誌の改良」(社告)、『運動界』第三巻一号、明治39年1月、見返し頁
- (10) 日本体育大学体育史研究室: 『運動界 解説』大空社、1986、p.11
- (11) 「『運動界』は如何なる雑誌なりや」、『運動界』第1巻第1号、明治37年7月、p.2
- (12) 日本体育大学体育史研究室: 『運動界 解説』大空社、1986、p.9
- (13) 「支部規則」、『運動界』第1巻第1号、明治30年7月、見返し頁の「社告」
- (14) 「運動会懸賞投稿募集」、『運動界』第2巻第4号、明治31年4月、見返し頁
- (15) 「運動会懸賞投稿募集」、『運動界』第2巻第4号、明治31年4月、見返し頁
- (16) 「投稿規則」、『運動界』第2巻第7号、明治31年7月、見返し頁
- (17) 「広告料」、『運動界』第1巻第1号、明治30年7月、見返し頁
- (18) 「運動界概則(広告料)」、『運動界』第2巻第10号、明治31年10月、見返し頁
- (19) 諸橋轍次: 『大漢和辞典』大修館書店、昭和34年、第11巻
- (20) 木下秀明: 『日本体育史研究序説 - 明治期における「体育」の概念形成に関する史的研究 - 』、不昧堂出版、昭和49年、p.21
- (21) 木下秀明: 前掲書pp.27-28
- (22) 「東京開成学校」、『文部省第一年報』、153丁 及び木下秀明: 前掲書、p.29
- (23) 『東京帝国大学50年史』上、昭和7年、p.284 及び木下秀明: 前掲書、p.29
- (24) 「学監米人博士グウィッド・モレー申報」、『文部省第一年報』、142丁 及び木下秀明: 前掲書、p.29
- (25) 本書は体操伝習所が体操などの人為的運動を補完すべき自然運動として欧米の書物から次に掲げる種目を翻訳紹介したものである。: 1. 鹿や鹿や、2. 盲目鬼、3. 鬼遊び、4. 卵帽子、5. 日月火水木、6. 投球競争、7. 旗拾ヒ、8. 旗戻シ競走、9. 二人三脚競走、10. 囊脚競走、11. ボーム、12. 綱引、13. 行進法、14. 投環(クオイツ) 15. 投球(ボールス) 16. トロコ、17. フートボール、18. 循環球(クロッカー) 19. ローテニス、20. ベースボール、21. 漕櫓術

- (26)本書はF.W.Strang(東大予備門英語教師でわが国学生スポーツの祖)が明治16年に英文で著わしたもので、スポーツを知らない学生に戸外ゲームを紹介することを目的に、17の遊戯ないし球技と14の陸上競技種目を紹介している。(木下秀明:『体育スポーツ書解題』不昧堂出版、昭和56年、p.521)
- (27)本書はストレンジの「Out Door Games」を骨子にして他の戸外遊戯を記述した洋書を参考にして抄訳編集したものである。第1編徒手遊戯(ブリズナースペースなど8種) 第2編弄玉遊戯(カッチボール、ベースボールなど9種) 第3編争強遊戯(100ヤードレース、ハルドルレーシングなど8種)などが掲載されている。
- (28)木下秀明:前掲書、p.195
- (29)木下秀明:前掲書、p.199
- (30)木下秀明:前掲書、p.199
- (31)木下秀明:前掲書、p.199
- (32)『『運動界』は如何なる雑誌なりや』、『運動界』第1巻1号、明治30年7月、p.2
- (33)『運動場裏の行状』、『運動界』第1巻第1号、明治30年7月、p.2
- (34)『運動我観断片』、『運動界』第1巻第4号、明治30年10月、p.16

【Abstract】

A Historical Study on the concept of Undo
Concept of Undo by the article in the sports magazine
“ The Athletic World ”

Kuniko NOGUCHI

The purpose of this study is to clarify the concept of Undo, “The Athletic World”, a sports magazine published in Japan, contained an article to solve the organized process and concept of Undo.

The notion of Undo in books written before the Meiji era was a means of hygiene. From the middle of Meiji era, the notion of Undo has meant competitive sport because of the establishment of a sports club in higher education organizations. In “The Athletic World” published in 1897, new meanings were given to the concept of Undo. As the writers of “The Athletic World” were the people concerned with sports clubs in higher education organizations, the concept of competitive sport was incorporated in “The Athletic World.”

With special reference to the article of “The Athletic World,” the notion of Undo got the meaning not only of physical exercise, which glows a healthy body by moving body, but of sport and play. Since the main readers of “The Athletic World” were students in higher education organizations they played the leading role of sports in the Meiji era. It could be considered that the notion of Undo described in “The Athletic World” had a important role in fixing the concept of Undo.

From the consideration mentioned above, it can be said that the notion of Undo in “The Athletic World” had the same meaning within a wide spectrom of sports and had a important role in fixing the concept of Undo.

